

『帆・ランプ・鷗』語彙索引稿(三)

下河部 行 輝

凡例は、第十号参照のこと。

なお、附風語である助詞、助動詞にあつては、意味を表わす最

小の文節を含めて示す。又、助詞と助動詞とを一括にせず、それ

助詞

か〔副〕 なにか唄つてゐる。一—16

信天翁がランプか 一—21

ランプが信天翁か 一—21

誰れか 一—41 いつかの

夜 一—50 思ひなしか

一—59 いくつか通り抜け

た 一—52

〔終〕

帆に見えようか? 一—19

來てゐたのだらうか? 一—19

お前ぢやなかったか

一—45 來たか? 一—57

ゐるぢやないか 一—58

それを別項に仕立てた。又、格助詞は〔格〕、副助詞は〔副〕、

係助詞は〔係〕、接続助詞は〔接〕、終助詞は〔終〕、並立助詞

は〔並〕、間接助詞は〔間〕のよう示した。

またゐるぢやないか 一—

58

が〔格〕

船が 一—14 鷗が 一—

14 魚が 一—14 夜が

一—14 牡蠣殻が 一—14

夕暮が 一—14 息子の水

夫が 一—14 船長が 一—

14 滑車が 一—16 鷗

が 一—16 月が 一—16

入墨の錨が 一—16 鷗が

一—17 鷗が 一—18 鷗

が 一—20 錨が 一—20

鷗が 一—20 思ひが 一—

一—20 信天翁が 一—21

ランプが 一—21 航海ラ

ンプが 一—22 信天翁が

一—22 信天翁が 一—22

ローマ字が 一—23 馬が

一—23 象が 一—23 象

追ひが 一—23 なにか

一—23 ランプが 一—23

樂隊が 一—23 音だけが

一—23 牛が 一—26 牛

が 一—26 牛が 一—26

牛が 一—26 牛が 一—

26 枝が 一—26 枝が

一 26 枝が 一 26 き
 ぎめきが 一 27 鴉が
 一 29 蝙蝠が 一 29
 めいめいが 一 29 なに
 が 一 30 河の息が 一
 一 32 麥酒とが 一 33
 梅が 一 40 鶴が 一
 40 裏羽根が 一 40 氣
 が 一 41 陽が 一 41
 笛が 一 42 アシカが
 一 42 水面が 一 42
 アシカが 一 42 匂ひが
 一 42 鳥が 一 44 指
 が 一 45 風雨が 一
 46 眼が 一 46 砂が
 一 46 針が 一 47 耳
 が 一 47 聲が 一 47
 鬚が 一 47 顔が 一
 47 砂が 一 47 瞳が
 一 47 夢の中で登ったの
 が 一 50 山が 一 50
 山が 一 50 氣が 一

50 ありくひが 一 51
 熊が 一 51 噴水が 一
 一 51 星が 一 52 機械
 が 一 52 場所が 一
 52 象が 一 54 體弱が
 一 54 氣が 一 54 こ
 れが 一 54 おれ自身が
 一 54 カンガルーの奴が
 一 55 人たちが 一 56
 屍が 一 56 約束が 一
 一 56 彈が 一 56 彈丸
 が 一 56 ひとり
 一 57 膝が 一 57 膝が
 一 57 健吉が 一 58
 健吉が 一 58 健吉が
 一 58 健吉が 一 59
 健吉が 一 59 正太が
 一 58 正太が 一 58
 正太が 一 58 正太が
 一 59 羽根が 一 58
 石ころが 一 59 姿が
 一 59 葉と葉とが 一
 59 空が 一 59 氣が

〔格〕

〔接〕

〔副〕

一 59
 ゐなくなるだけだが 一
 22 苦笑するが 一 50
 夢でしたが。 一 52 あり
 ませんでした。 一 54
 淡水から 一 14 街から
 一 14 私から 一 19
 霧の中から 一 32 岩か
 ら 一 42 波間から 一
 42 笑ひの中から 一
 45 胸から 一 46 敵か
 ら 一 46 かげから 一
 47 山だったといふところ
 から 一 50 枝から 一
 一 58 樹から 一 58 そ
 こから 一 59 瑠璃色か
 ら 一 59
 〔接〕
 巻かれさうになるから 一
 一 50 をさまりかねたから
 一 54 ありませんから
 一 56 氣が附いたから
 一 59
 〔副〕
 きり〔副〕
 見たきり 一 41
 さえ〔係〕
 顔さへ 一 50 掩蓋の中

にさへ 一—56

しか〔係〕 泣いていたとしか 一—45

すら〔副〕 私自身にすら 一—19

ぞ〔終〕 お前の方だぞ 一—45 寝

てゐるぞ 一—50

だけ〔副〕 ゐなくなるだけ 一—22

音だけ 一—23

たり〔並〕 砂を捲いたりして 一—56

て〔接〕 着換へて 一—14 きても

一—14 喰れて 一—16

来て 一—17 硬えて 一—

20 驚いて 一—20 背

ざめて 一—20 なって

一—20 明けて 一—22

暮れて 一—22 替って

一—23 ランプが眼ばたき

して 一—23 引き摺って

一—32 そよいで 一—26

どよめいて 一—26 さざ

めいて 一—26 さざめい

て 一—26 揺って 一—

27 重ねて 一—27 起き

上って 一—28 かけちが

って 一—29 傾けて 一—

30 押して 一—32 抱

いて 一—33 慰め合って

一—33 立ち上って 一—

34 なくて 一—40 變へ

て 一—40 伸ばして 一—

40 洩れて 一—40 し

て 一—41 喰れて 一—

42 撥ね合って 一—42

させて 一—44 落して

一—44 来ては 一—45

向き直って 一—45 突き

出て 一—45 して 一—

50 かうして 一—50 き

て 一—50 搦いては 一—

51 あと退去っては 一—

51 縮んで 一—51 巨

きすぎて 一—54 落して

一—54 私にとつて 一—

56 なって 一—56 撰っ

て 一—56 捲いたりして

一—56 ひきかへて 一—

57 話しかけて 一—57

ガックリして 一—57 仰

向いて 一—59 撥ね返へ

って 一—59 紛はしくな

って 一—59 重なり合っ

て 一—59 小さくて 一—

47

(一—てゐる) 飲んでゐる

一—16 唄ってゐる 一—

16 ゆらいでゐる 一—16

羽搏いてゐる鳥 一—17

瞬いてゐるせる 一—17

消えてゐる鐘鎖 一—18

逃げてゐる帆索 一—18

照らしてゐるばかり 一—

18 噴めてゐる砲 一—18

反射してゐる帆 一—19

囁いてゐる 一—20 伸び

縮みしてゐる 一—23 う

ろついでゐる 一—23 し

てゐるのだ 一—30 迂回

している 一—32 櫻んでゐる
一—33 嚙んでゐる 一—
34 灯してゐる 一—37
押してゐる 櫓 一—38 立
つてゐる 一—40 立って
ゐる 一—40 剪られてゐ
る 一—40 摺り落してゐる
やうな 一—41 なくなつ
てゐること 一—41 滲ん
でゐるばかり 一—41 笛
を持つてゐる 一—42 泳
いでゐるやうな 一—42
鳴いてゐる 一—42 考へ
てゐる 一—43 濡れてゐ
るもの 一—46 明滅して
ゐる表情 一—47 まみれ
てゐる 一—47 肥つてゐる
僕 一—50 当てゐる 一—
50 寝てゐるぞ 一—50 喜
んでゐる 一—50 假睡むで
ゐる硝子戸 一—51 見て
ゐるまに 一—51 そよい

でゐる仕事場 一—52 拵
へてゐるのだな 一—54
とまつてゐるのです 一—
58 輝いてゐるのですた
一—58 見張つてゐる 一—
58 瞋めてゐるうちに
一—59
(一—てゐた) かくれてゐた
一—27 寄り添はうとして
ゐた 一—28 頬笑まうと
してゐた 一—28 坐らう
としてゐた 一—28 夢み
てゐた 一—28 くつてゐ
た 一—29 ひそんでゐた
一—29 暮してゐた 一—
29 照らしてゐた 一—34
咲いてゐた 一—40 來て
ゐたのだらうか? 一—41
泣いてゐた 一—45 泣い
てゐたのは 一—45 塞い
でゐた 一—46 遮つてゐ
た 一—46 垂らしてゐた

一—47 覗いてゐた 一—
47 泳いでゐた 一—47
覗いてゐた 一—52 覗い
でゐたのだつた 一—59
(一—てゐます) 云つてゐま
す 一—58 搜してゐます
一—59
(一—てゐました) 振き寄せ
てゐました 一—51 見て
ゐました 一—52 見てゐ
ました 一—52 搜してゐ
ました 一—54 とまつて
ゐました 一—59 傾けて
ゐました 一—59
(一—くる) 寄つてくる 一—
14 おりてくる 一—23
寄り添つてくる 一—32
湧き昇つてくる 一—42
こみ上げてくる水の珠に
一—43 押してくる風雨
一—46 してきて 一—50
歩いて來た 一—50 出て

来た 一—52 戻ってきた

一—57

(一—てきました) おりて来

ました 一—58 引き返し

て来ました 一—58 落ち

て来ました 一—59

(一—てゆく) 沈んでゆく

一—20 引っ込んで行くの

でした 一—51 登って行

くこと 一—58

(一—て行った) 嘸いて行っ

た 一—16 埋れて行っ

一—28 動かして行っ

一—42 落して行っ

一—44 翻って行っ

一—44

(一—てゆきました) 固くな

ってゆきました 一—56

(一—てしま) もぐりこん

でしまひさうに 一—59

(一—てしまった) 行っ

まったのだらう 一—41

つらぬかれてしまった 一

一—43

(一—てみる) 拾ってみれば

一—44 透かしてみると

一—58

(一—ておく) 繋いでおいた

ら 一—52

(一—ておる) 上ってをりま

した 一—51

(一—てぬらあ) 吸ってぬら

あ 一—50

ひとりで 一—14 空で

一—17 遠くで 一—18

砂の蓋で 一—31 中で

一—26 中で 一—26 中

で 一—26 中で 一—26

水面で 一—34 両舷で

一—40 遠くで 一—42

夢の中で 一—50 山で

一—50 むかふで 一—51

掌で 一—51 反射の中で

一—54 鼻で 一—54 陽

かげの中で 一—55 下で

一—58

夜が来ても 一—14

なんとせう 一—22 寄り

添はうとしてゐた 一—28

坐らうとしてゐた 一—28

なにを防がうとしてゐるの

だ 一—30 飛ばうと焦慮

るのだらう 一—40

と憶えてゐる汀に 一—40

一—と憶えてゐた 一—40

抱かうとする 一—40 と

果して 一—41 かうなっ

たのだ?と考へてゐる 一

一—43 お前ぢやなかったか

と 一—45 ニタリと 一

一—45 泣いていたとしか見

えなかつた 一—45 嬉々

として 一—47 咄でいる

と云ひ 一—50 山だった

といふところから 一—50

吸ってゐらあなどと 一—

50 びつしよりと 一—52
 鯨の頭だったといふ 一—
 52 瞬いてゐたといふ 一—
 52 變化したといふ 一—
 52 見るものとみえます 一—
 53 とまづ感服する 一—
 54 と鼻で鼻の汗を 一—
 54 それと思ふ 一—
 54 暑いのだらう?と 一—
 54 成程。と 一—54
 なることならと 一—56
 敵弾と内密の約束が 一—
 56 存在しないといふこと 一—
 は 一—56 「来たか!」
 と 一—57 小鳥は?と訊
 くと 一—58 はつきりと
 一—58 こっそりと 一—
 58 見えなくなつたと 一—
 58 あるぢやないか、と
 一—58 逃げたんだらう、
 などと 一—58 さつきと
 同じ所に 一—58 まだる

〔接〕

るぢやないか、と 一—58
 逃げたんだらう、などと
 一—58 さつきと同じ所に
 一—58 まだるぢやない
 か、と 一—58 バカヤロ
 ウノと 一—59 覗いてゐ
 たのだったと 一—59 ち
 ぎれ葉と一緒に 一—59
 馬が駈け込むと 一—23
 近寄ると 一—40 現實に
 になると 一—45 見返すと
 一—47 顔さへ見ると 一—
 50 離れると 一—51
 様子を探ふと 一—51 覗
 くと 一—52 向きがかは
 ると 一—57 透かしてみ
 ると 一—58 見張つてゐ
 ると、一—58 近附くと
 一—58 樹からおりと
 一—58 小鳥はと訊くと、
 一—58
 ランプと帆は 一—19 日
 と夜とかけちがつて 一—
 29 夜の女とレットルのな
 い麥酒とが 一—36 風と

な〔終〕

雨 一—36 その象と鯨の
 尾を 一—52 葉と葉とが
 重なり合つて 一—59
 うるさいな。一—50 陽か
 げなのだな 一—54 拵へ
 てるのだな 一—54 影
 だな。一—54

ながら〔接〕

飲みながら 一—16 思ひ
 ながらも 一—41 われな
 がら 一—50 掻き寄せな
 がら 一—51 拭きながら
 一—54

など〔副〕

「…、煙草を吸つてゐらあ」
 などと 一—50 逃げたん
 だらう、などと 一—58
 帆索に 一—14 孔に 一—
 14 潮風に 一—14 船
 腹に 一—14 たびに 一—
 14 袖に 一—14 帆索
 に 一—16 河口に 一—
 16 満潮に 一—16 底に
 一—16 肩に 一—17 空

に〔格〕

に 一—16 肩に 一—17 空

に 一 17 掌に 一 17
 首に 一 17 うへに 一
 17 海面に 一 18 マ
 ストに 一 18 私に 一
 18 私自身に 一 19
 ランプに 一 19 帆に
 一 19 耳に 一 20 不
 意に 一 20 水に 一
 20 胸に 一 20 啼き聲
 に 一 20 空に 一 20
 ランプに 一 21 信天翁
 に 一 21 マストに 一
 22 海には 一 22 風
 に 一 23 用意に 一
 23 一齊に 一 23 一齊
 に 一 26 一齊に 一
 26 一齊に 一 26 枝に
 一 27 一齊に 一 27
 その笑ひに 一 27 一つ
 に 一 28 砲架に 一
 28 ひと風ごとに 一 28
 砂に 一 28 砲口に 一

29 崩れには 一 29
 錆に 一 29 中に 一
 29 艦に 一 30 一杯に
 一 30 風に 一 30 柩
 に 一 31 蓋に 一 31
 道に 一 32 霧に 一
 33 海に 一 34 齒車に
 一 35 ベルトに 一 35
 胸に 一 37 汀に 一
 40 たびに 一 40 なく
 なっていることに
 一 41 ために 一 41
 斜に 一 41 氷に 一
 41 喉に 一 42 垢に
 一 42 不意に 一 42
 とたん に 一 42 そここ
 一 42 珠に 一 43 た
 めに 一 43 箱に 一
 44 疲勞に 一 44 中に
 一 45 現實に 一 45
 あべこべに 一 45 押し
 倒しに 一 45 背中

一 46 風雨に 一 46
 砂に 一 46 無敵に 一
 46 意外に 一 47 a
 に 一 47 夕暮れに 一
 47 夕暮に 一 47 砂
 に 一 47 昏に 一 47
 山に 一 50 山にして
 一 50 雲に 一 50 夏
 に 一 51 まに 一 51
 高さに 一 51 遠くに
 一 52 意外にも 一 52
 知らぬまに 一 52 大木
 に 一 52 かやうに 一
 53 夜明けには 一 53
 地面に 一 54 ときに
 一 55 忌々しいことに
 一 55 私に 一 56 彈
 丸に 一 56 掃射に 一
 56 實に 一 56 炸裂
 に 一 56 左に 一 56
 右に 一 56 所に 一
 56 中に 一 56 約束が

の〔格〕

あつたに 一—56 無造作
 に 一—56 どれにも 一—
 56 戦争に 一—56 行
 くべきところに 一—57
 戦友たちに 一—57 岩に
 一—57 懐に 一—57 不
 意に 一—58 あそこに
 一—58 高い所に 一—58
 葉がくれに 一—58 欄ま
 へに 一—58 行くことに
 一—58 眼にも 一—58
 同じ所に 一—58 恰好に
 一—59 一緒に 一—59
 噴めてゐるうちに 一—59
 中に 一—59 茜色に 一—
 59
 船乗の心 一—14 ビルジ
 の孔 一—14 息子の水夫
 一—14 爐の樽間 一—16
 船長の胸 一—16 ラム酒
 の満潮 一—16 その流れ
 の底 一—16 入壘の錨

一—16 昇るのだらう 一—
 16 ランプの隣いて 一—
 17 姿の見えない 一—
 17 海の上 一—17 鷗の
 羽根 一—17 海の上 一—
 17 鷗の聲 一—17 ラ
 ンプの燃殻 一—17 燃殻
 のうへ 一—17 姿の見え
 ない 一—17 とまるのを
 一—17 眼のとどかない
 一—18 眼のとどかない
 一—18 私の眼 一—18
 私の眼 一—18 私の光
 一—18 盲目の私 一—18
 私の顔 一—18 闇の遠く
 で 一—18 私の姿 一—
 19 錨の耳 一—20 鷗の
 胸 一—20 マストのラン
 プ 一—21 マストの航海
 ランプ 一—21 海の信天
 翁 一—21 ランプの灯ら
 ない 一—22 マストの航

海ランプ 一—22 三橋帆
 船のマスト 一—22 暗の
 波路 一—22 小晁の天幕
 一—23 帆の檻櫃 一—23
 船の名 一—23 名のロー
 マ字 一—23 象の典藝
 一—23 喇叭の音 一—23
 小屋の天幕 一—23 始ま
 るのだらう 一—23 繁み
 の中 一—26 繁みの中
 一—26 繁みの中 一—26
 繁みの中 一—26 候鳥の
 閃き 一—28 砲架の崩れ
 一—29 思念の中 一—29
 ほかのなに 一—30 帆の
 やうに 一—30 してゐる
 のだ 一—30 砂の蓋 一—
 31 泪の針 一—31 燈
 火の思ひ出 一—32 夜明
 けの空 一—32 空の下
 一—32 夢のやうに 一—
 32 河の息 一—32 霧の

中 一 32 レッテルのな
 い 一 33 レッテルのな
 い 一 33 レッテルのな
 い 一 33 夜の女 一
 33 夜の女 一 33 夜の
 女 一 33 裏町の夜更け
 一 33 眠らせるのは 一
 一 33 闇の彼方 一 34
 彼方の水面 一 34 鷗の
 群 一 34 舳の雨 一
 34 行くのだらう 一 34
 頸の布片 一 36 裸の膝
 一 36 鬚のわくら葉 一
 一 36 困憊の押しあたる
 一 38 櫓の音 一 38
 梅の木 一 40 眼の色
 一 40 私のまはり 一
 40 竹枝のやうに 一 40
 櫛の齒 一 40 齒のやう
 に 一 40 私の肩 一
 40 打つのである 一 40
 焦慮るのだらう 一 40

念のため 一 41 行つ
 しまつたのだらう 一 41
 ゐたのだらうか 一 41
 潮の垢 一 42 蒸氣の洩
 れる 一 42 安全辨のや
 うに 一 42 アルコール
 のやうに 一 42 鴉のや
 うに 一 42 水の珠 一
 一 43 なんのために 一
 43 なつたのだ 一 43
 夜の廂 一 44 夢の中
 一 45 その笑ひの中 一
 一 45 ステッキのやうに
 一 45 泣いてゐたのは
 一 45 お前の方 一 45
 笑ふのである 一 45 風
 雨の背中 一 46 風雨の
 吹き込む 一 46 表情の
 皷 一 46 時計の頭 一
 一 47 寛服の裾 一 47
 シグナルのやうに 一 47
 a のかけ 一 47 a の顔

泪の池 一 47 池の底
 一 47 夢の中 一 50
 いつかの夜 一 50 形の
 圓い山 一 50 僕の顔
 一 50 登ったのが 一
 50 硝子戸の前 一 51
 見たきりの熊 一 51 熊
 の檻 一 51 北向きの鐵
 格子 一 51 鐵格子のむ
 かふ 一 51 床の落葉
 一 51 正面の窠形 一
 51 蕪菜の穴 一 51 穴
 の奥 一 51 巻きタバコ
 ほどの高さ 一 51 憶ひ
 出すのでした 一 51 行
 くのでした 一 51 鼻の
 孔 一 52 暗箱のやうな
 一 52 曠野の空 一 52
 嵐のやうに 一 52 豆電
 燈ほどの星 一 52 鯨の
 顎 一 52 銀杏の大木
 一 52 鯨の尾 一 52

私のは 一—52 眞晝の反
 射 一—54 反射の中 一—
 54 象の體軀 一—54
 鼻の汗 一—54 謎の結び
 目 一—54 脚もとの地面
 一—54 屋根のやうな 一—
 54 おれの形 一—54
 暑いのだらう 一—54 考
 へ沈むのでした 一—54
 感服するのでした 一—54
 拵へてゐるのだな 一—54
 隔かげなのだな 一—54
 カンガルーの奴 一—55
 その隔かげの中 一—55
 始めるのでした 一—55
 脚もとの砂 一—56 戦ひ
 の中 一—56 四十冊の炸
 裂 一—56 蓮の實 一—
 56 機関銃の掃射 一—56
 内密の約束 一—56 一つ
 づつの敵弾 一—56 掩蓋
 の中 一—56 無数の屍

ので〔接〕
 は〔係〕

一—56 弾盒のどれにも
 一—56 敵兵の彈盒 一—
 56 ちがひないのです 一—
 56 子供のやうに 一—
 57 お母さんの懐 一—57
 顔の頬 一—57 くったの
 です 一—57 瑠璃色の羽
 根 一—58 顔の正太 一—
 58 口真似のやうな 一—
 58 正太の眼 一—58
 見えるのです 一—58 云
 ふのです 一—58 ゐるの
 です 一—58 輝いてゐる
 のです 一—58 逃げたん
 だらう 一—58 繁みの中
 一—59 枝の股 一—59
 眼の覚めるやうな 一—59
 夕暮の空 一—59 覗いて
 ゐたのだった 一—59
 短かすぎるので 一—47
 船長は 一—14 唄は 一—
 16 聲は 一—17 羽根

は 一—17 姿の見えない
 のは 一—17 私 は 一—
 17 光は 一—18 姿は
 一—19 帆は 一—19 私
 は 一—19 船は 一—20
 恒天翁は 一—21 航海ラ
 ンプは 一—21 廣い海に
 は 一—22 マストは 一—
 22 天幕は 一—23 曲
 藝は 一—23 枝は 一—
 27 さざめきは 一—27
 破片は 一—28 砲身は
 一—28 龜裂は 一—28
 土砂は 一—29 崩れには
 一—29 家並は 一—32
 夜の女を眠らせるのは 一—
 33 女は 一—33 ラン
 プは 一—34 鴉の群は
 一—34 河は 一—37 風
 は 一—40 脚は 一—40
 鶴は 一—40 梅の木は
 一—40 暫くは 一—42

アシカは 一—42 迹は
 一—42 アシカは 一—42
 鶴は 一—43 物は 一—
 44 あれは 一—44 夢の
 中に來ては 一—45 泣い
 てゐたのは 一—45 風雨
 は 一—46 額は 一—46
 脇は 一—46 額は 一—
 47 時計の額は 一—47
 をりをりは 一—50 自分
 は 一—50 僕は 一—50
 ケンキチは 一—50 あと
 退去つては 一—51 扱
 ては 一—51 姿は 一—
 51 中は 一—52 私は
 一—52 私のは 一—52
 夜明けには 一—53 物か
 げもないではありませんで
 したが 一—54 いまは
 一—54 象は 一—54 陽
 かげは 一—54 おれは
 一—54 人たちは 一—56

へ〔格〕

海へ歸らなかつたら 一—
 一—54
 り 一—54 少しばかり
 一—54
 だった 一—41 おればか
 一—40 滲んでゐるばかり
 一—19 引き摺るばかりだ
 一—18 闇を廻るばかりだ

ばかり〔副〕

照らしてゐるばかりだ 一—

ば〔接〕

肩を廻せば 一—17 手を
 伸せば 一—17 拾つてみ
 れば 一—44 左に行けば
 一—56 高い所に登れば
 一—56

も〔係〕

22 こちらへ突き出て 一—
 一—45 奥へ引つ込んで 一—
 一—51 それへをさまりかね
 たからでした 一—54
 胸まで垂らしてゐた 一—
 47 そこまで考へたときに
 一—55 ここまで話しかけ
 て 一—57
 心も 一—14 今宵も 一—
 一—16 胸も 一—16 言葉
 も 一—20 ランプも 一—
 一—21 信天翁も 一—21
 はやくも 一—34 それも
 一—40 思ひながらも 一—
 一—41 気配も 一—41 早
 くも 一—42 悪太郎も
 一—45 考へることも 一—
 一—50 意外にも 一—52
 物かげも 一—54 どれに
 も 一—56 適中するはず
 も 一—56 早くも 一—
 57 眼にも 一—58 身じ

や〔並〕

ろぎも 一—59 聲も 一—59

ランブやランブに反射して
るる帆に 一—19 客間や
機械が 一—52 ころがる
人や四十冊の炸裂に 一—

56 鶴よ 一—30

よ〔終〕

より〔格〕 羽根よりほかの 一—30

を〔格〕

錨を 一—14 錨を 一—
14 服を 一—14 背いら
ンブを 一—14 ラム酒を
一—16 羽根音を 一—16
胸間を 一—16 肩を 一—
17 手を 一—17 ラン
ブを 一—17 とまるのを
一—17 顔を 一—18 私
を 一—18 間を 一—19
波路を 一—22 襦袢を
一—23 鞭を 一—23 索
を 一—23 枝を 一—27
原形を 一—28 果を 一—

29 羽根を 一—30 羽
根を 一—30 なにを 一—

30 花びらを 一—31
花びらを 一—31 針を
一—31 空の下を 一—32
思ひ出を 一—32 夢を
一—32 麥酒を 一—33

夜の女を 一—33 夜更け
を 一—33 聲を 一—34
雨を 一—34 わくら葉を
一—36 花を 一—37 ま
はりを 一—40 頸を 一—
40 空気を 一—40 坭
を 一—40 鬩を 一—40
肩を 一—40 坭を 一—
41 笛を 一—42 笛を

一—42 身を 一—42 鱧
を 一—42 喉を 一—43
空気を 一—44 羽根を
一—44 私を 一—45 眼
を 一—46 風雨を 一—
46 風雨を 一—46 花を

一—46 襦袢を 一—46
坭土を 一—46 濡れてる
るものを 一—46 裾を
一—47 底を 一—47 僕
を 一—50 烟草を 一—
50 人を 一—50 前を
一—51 檻を 一—51 楳
子を 一—51 落葉を 一—
51 穠を 一—51 象を
一—52 夢を 一—52 仕
事場を 一—52 夢を 一—
52 鯨の尾を 一—52
汗を 一—52 夢を 一—
53 陽かけを 一—54 汗
を 一—54 眼を 一—54
結び目を 一—54 陽かけ
を 一—54 軒を 一—55
命を 一—56 彈道を 一—
56 戦ひの中を 一—56
砂を 一—56 私を 一—
56 夜を 一—56 おいて
けぼりを 一—57 鬩を

研究室受贈圖書雑誌目録（Ⅵ）

- 一—57 梢を 一—58 こと
 とを 一—58 口を 一—
 58 方角を 一—58 石ころを 一—59 股を 一—
 59 首を 一—59 隙間を 一—59 小鳥を 一—59
 日暮れりゃ マストのラン
 プに化ける 一—21 夜明けりゃ 海の信天翁にかへる
 一—21
- 武庫川国文（武庫川女子大学国文学会） 第二十三号
 百舌鳥国文（大阪女子大学大学院） 第四号
 野州国文学（国学院大学栃木短期大学） 第三十二号、第三十三号
 山口国文（山口大学） 第七号
 山辺道（天理大学） 第二十八号
 論究（二松学舎大学・佐古研究室） 第八号、第九号、第十号
 論究日本文学（立命館大学） 第四十七号
 和洋国文研究（和洋女子大学） 第十九号

りゃ

「りゃ」は話しことばに訛語として現われたものであろうが、「よけりゃ」のよう
 うに使用され、ここでは、助詞として処理した。

〔以下統稿〕